後援会長として関係諸氏とともに微力を尽くしてまいりました私は、今回、はからずも総長の大任をお引き受けすることと相成り、開学の喜びと同時に、いよいよ責任を痛感している次第です。

当時、神社本庁常務理事として微力ながら皇學館の復興に協力していた、わたくしの父・上杉一枝は、いくども大磯の吉田茂邸を訪ねている。そのたびに吉田氏は「私の時代に皇學館を潰した。申し訳ない。私の責任で再興させよう」と語っておられたという。

もしも吉田氏のご尽力がなければ、はたしてわが皇學館は再興し得たであろうか。よしんば再興し得たとしても、相当の年月を要したのではあるまいか。もちろん吉田氏ばかりではない。神道を建学の精神とし、神道教育を実践してきた、わが皇學館の苦難の歴史を顧み、先人たちの努力と協力に深く思いをいたすとき、あとに連なるわたくしどもはますます責任の重大さを痛感せざるを得ない。

（平成一八年一一月三日、明治節の日に）

註　本稿脱稿のあと、平成一八年一二月に新しい教育基本法が成立し、施行された。さらなる改革を期待してやまない。

特集　宗教教育の地平

市民的公共性と宗教的情操教育

――NPO法人立のホリスティックな学校事例から

吉田敦彦（よしだ　あつひこ）

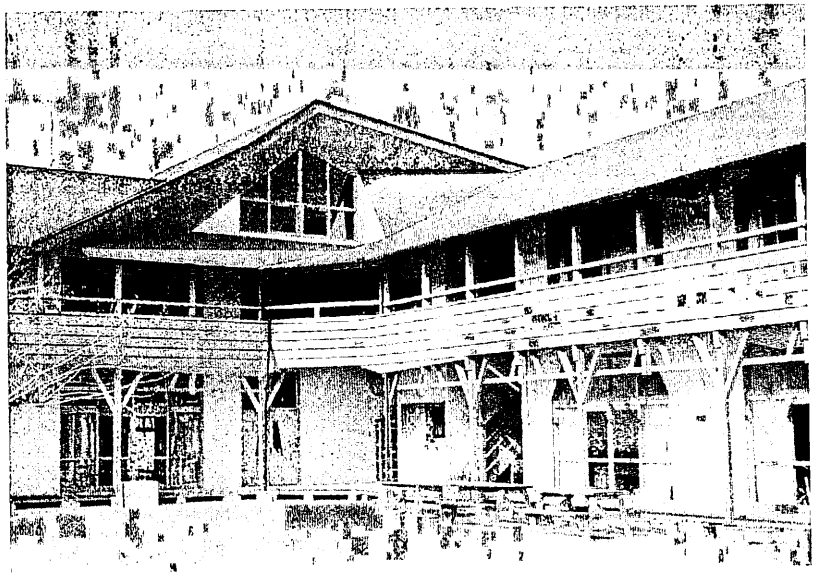
はじめに

♪太陽と雨と
人の手が育てた
恵みの食べもの
かみさま
ありがとう♪

お弁当の時間がはじまるとき、低学年の子どもたちが毎日この唄を歌って「いただきます」をする学校がある。京都府南部にあるNPO法人京田辺シュタイナー学校。あるクラスでは、たとえば次のことばを朗誦して授業を終える。（授業者＝太田和見、二〇〇四年七月の公開授業より。）

霧のかなたより
聖なる鐘の音がひびく
尊いものは　いつも
わたしたちの　心の眼によって
見出される

心の眼によって見出される尊いもの。聖なるひびき。世俗化を徹底してきた公立学校では、なかなか踏み込めないそれを、なんとか慎重に、丁寧に、でも時には大胆



京田辺シュタイナー学校の校舎

に、子どもたちの学びに取り入れようとしている。

ある既成の宗派教団によってではなく、バックグラウンドは様々でありながら、共に眼にみえないものを大切にしようとする親と教師によって創られた学校。このNPO法人立のシュタイナー学校は、国家統制をうけた近代教育システムに対して、ボランタリーな市民の手で代案となる学び場を創出していく「オルタナティブ教育」運動と、世俗的に一面化した近代社会にあって、新しいスピリチュアリティを探求する「新霊性運動・文化」の交点に生まれてきた、一連の「ホリスティック教育」の典型事例である。

本稿では、このような事例をも視野に収めて「宗教教育の地平」を見渡すとき、その諸相をどのような布置において捉えなおすことができるか、ひとつの見取り図を提案したい。

まず、筆者が二〇〇三年からアクションリサーチを続けているNPO法人京田辺シュタイナー学校の事例を、とくにその「宗教的なるもの」に関わる教育に焦点を当てて紹介する。次に、その実践事例を、宗教教育一般の

地平において捉えるために、従来の「宗教教育」理解の枠組みを、「国家の公／私的領域／市民の公共」という三元論を導入して拡張する。さらに、多義的な「宗教的情操」概念を四つの位相に分析して、現在の宗教教育をめぐる少なからず錯綜した議論を整理するとともに、そこにこの事例を位置づける。最後に、このシュタイナー学校の事例が孤立したものではなく、グローバル化する現代世界に対応しながらホリスティックな教育を模索する広い潮流の一環であることをみて、その意義を明らかにしたい。

1　NPO法人立シュタイナー学校の教育実践事例

NPO法人京田辺シュタイナー学校の合言葉は、「親と教師がともに創り続ける学校」である。一九九四年に数人の母親を中心にした勉強会から始まり、週一回の土曜クラスの運営を経て、二〇〇一年四月に全日制として発足した。現在は、一年生から一二年生までの二〇九名の生徒たちが通っている。

シュタイナー教育については、概説書も多く、すでによく知られているところだろう。意志、感情、思考を、発達段階に即して密接につなぎながら育む全人的な教育。歌や詩、黒板絵や水彩画など芸術に浸された授業。朝の最初の一〇〇分間はエポック授業（メインレッスン）と呼ばれ、教科書を用いず、先生と共に手づくりの教科書（エポックノート）をつくる……等々。その教育の全体像や、背景にある世界観や人間観については、既刊書にゆずる（西平 1999、吉田・今井 2001、ほか）。ここでは、そのなかの「宗教的なるもの」ないし「スピリチュアリティ」のあり方に絞って、この学校の具体的な事例を紹介する。

■教育と子どもを捉える視座

まず、この学校の「教育ヴィジョン」を見ておく。二〇〇五年の時点で教師会があらためて言葉にした文書がある（京田辺シュタイナー学校編 2006、一〇－一六頁）。その冒頭は、次のように始まる。

生命は、大河の流れのように、親から子へ、人か